

小学校における読書活動の推進

-絵本との出会いの場を通して-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
阿部 さおり

実習責任教員 末内 佳代
実習指導教員 小坂 浩嗣

キーワード: 読書活動の推進, 読書環境整備, 読み聞かせ, 絵本の読み合い, 短時間で読める絵本ブックリスト

第1章 研究課題と目的

1 読書の現状と課題

1) 読書を取り巻く状況について

子どもの読書活動の推進に関する法律(2001)の制定以来, 読書活動が推進されてきた。

全国図書館協議会と毎日新聞社(2016)によると, 2001年以降, 5月の小中学生の月間平均読書冊数は小学生11.4冊, 中学生4.2冊と, およそ2倍となったが, 不読者の割合は小学生4.0%, 中学生15.4%に及んでいる。高校生の平均読書冊数は1.4冊。不読者の割合は半数を大きく越える。読書が習慣化しているとは言い難い現状がある。

中教審答申(2016)では, 読書を, 国語科で育成をめざす資質・能力をより高める重要な活動の一つであると位置付け, 読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うため, 読書指導を改善・充実させ, 読書習慣を身に付ける取組の推進や語彙力向上の手立ての一つとして読書活動の充実を図る必要性が述べられた。

2) 絵本の読み聞かせの効用について

文化審議会(2004)は, 幼児期から小学校期までの時期に, 脳の成長過程や働きからも, 語彙力や情緒力, 想像力の育成に読み聞かせや読書が効果的であると述べた。

余郷(2011)は, 絵本の読み聞かせの一番大きい効果を「心地よい時間」「楽しい時間」の共有であり, その状態は, 自分自身と他者の命を愛し, 尊重し, 信頼する心の状態であると述べ

ている。

谷木(2010)は, 美馬中学校での実践や後の勤務校である美郷中学校の実践から, 絵本の読み聞かせと読み合いを通して, 読み聞かせを行う教師や友人とことばへの信頼感を築き, 心の安定や解放, 他者への寛容さを育み, 自己をのびのびと表現する学習から学力の向上にもつながったことを報告している。

2 実習校の現状と課題

1) 実習校の概要

実習校は, 全校児童139名, 単式学級6, 特別支援学級3の小規模校である。家庭環境等の様々な要因により, 基本的な生活習慣や態度の形成, 友達との関わり方などに困難を抱え, 家庭での学習・言語・読書環境も十分とはいえない児童も多い。

2) アセスメント結果と分析

実習校の児童は, 国語「読む能力」が弱い。平日の読書量が全国, 県平均と比べ少なく, 特に平日の不読者の割合が際立って高い。また, 過半数の児童の, 主に本を読む場所が, 教室であることが分かった。

3 実践研究の目的

読書活動を通して, 「子どもが, 言葉を学び, 感性を磨き, 表現力を高め, 創造力を豊かなものにし, 人生をより深く生きる力を身に付ける」ことを願い児童の生活環境状況等も踏まえ, 学校の中で, できる読書活動の取組の可能性を探ることをめざして, 実践研究を進めた(図1)。



図1「小学校における読書活動の推進 -絵本との出会いの場を通して-」構想図

第2章 方法

1 実践研究の方法

学校の中でできる読書活動の取組の可能性を探ることを目的として、小学校における読書活動の推進を図っていく。取組を行う中で、多忙な学校現場の中で働く教員たちに負担をなるべくかけず、後の学校生活の中に根付いていけるような実践を行うことを念頭において以下の4点について取り組むこととした。

1) 読書環境の整備

読書に関する掲示物や、新着図書やおすすめの本を手に取り読んだり、交流できたりするコーナーの設置。読書活動と連携したコーナーの活用の工夫。

朝会での絵本の読み聞かせなど、学校全体で絵本の楽しさを共有できる時間を持つようにする。読み聞かせは、教職員や6年生児童を中心に読み手を代えながら行う。

学級文庫の整理や、読み聞かせ用図書を保管した職員用書棚の整理。

2) 大学・公共図書館との連携

団体貸出制度を利用し、テーマや学年に応じて借り入れ、学級文庫の充実を図る。校内や鳴門教育大学附属図書館児童図書室、公共図書館からの借り入れ図書を利用し、短時間で読める

絵本を各学級に配置することで、すきま時間を有効に読み聞かせに充てられるようにする。

短時間で面白く、子どもたちの豊かな心の成長に寄与できそうな絵本を選び、時間を計測し明記したブックリストと共に毎週入れ替え、配置する。

学級担任からの依頼に応じて、学習関連図書の借り入れも積極的に行う。

3) 教職員との連携

1日1冊を目標に各担任に読み聞かせを依頼し、学級の状況に合わせて無理のないよう実践してもらう。読み聞かせをする時間は、特に固定せず、時間の取れるときとする。

朝会・集会での絵本の読み聞かせを交代で行ってもらうよう、理解と協力を依頼する。

協力学級を中心に、読書に関する授業やアンケートを実施する。

4) 家庭との連携

学校での取組の一環を知らせるとともに、家庭での読書の啓発や親子での読み合いの機会を呼びかける。

2 全体計画

2017年4月から10月までの4点の取組について計画した。

第3章 取組の実際

1 読書環境の整備

1) 異学年交流読書コーナー「お話の森通りⅡ」づくり

「お話の森通りⅡ」を作った。古くて暗い壁面にオレンジ色の大型画用紙を張り付け、その上に朝会の読み聞かせや学級で行った読書活動に関連する掲示物を作成し、貼っていった。また、コーナーには、ゆったりとした気持ちで本を読み、ちょっとした活動ができるように、ベンチと作業台を置いた。児童の目に留まりやす

い、表紙が見えるように置くことができる本棚を設置し「お話の森文庫」とした。これらの整備には、不要となったり、余ったりした備品を用い、必要な修繕をしてから再利用した。

その結果、通りがかりに足を止め、壁面掲示を見たり、作業台を使って授業で行ったPOPづくり体験コーナーに挑戦したり、ベンチに座って絵本を手にとって読んだりする児童の姿が見られるようになった。

身近な場所に興味を引く読書環境があれば、自然と関心が高まり読書活動が生活の中に息づいていくことが感じられた。

2) 学級文庫プラス！

授業中や生活の中で生まれる「すきま時間」を読み聞かせに利用できないかと考え、短い時間（概ね3分以内）で読めて、小学生が読んで面白いと思われる絵本を用意することにした。

1日1冊、絵本の読み聞かせが可能となるように、読み聞かせ用絵本ボックスを各教室に用意し、週の初めにその週に読む分の絵本をブックリストと共に配置した。週末には回収し、翌週には新しい絵本と入れ替えた。

本を入れ替えると、待ちかねたように手に取る子や、これまであまり本に関心のなかった子が興味を示し、読むようになった。中には、先週の絵本の何が面白かったとか、簡単な感想を告げてくれる子も出てきた。しかし、1週間での入れ替えは、絵本との出会いを多くできることの反面、慌ただしくゆっくり読めないという課題につながった。

3) 朝会・集会の活用

全校で、「心地よく楽しい時間」を共有するために、今ある時間の枠の中で無理なく行えるよう朝会や集会を活用した。絵本の絵が、どの位置の児童からもよく見えるように、スライド加

工した絵本をプロジェクターでスクリーンに投影し、読み手の朗読に合わせて筆者が操作するという方法をとった。読み手は、教員が交代で行い、後に児童へと移行していった。朝会での読み聞かせも定着し、今年度中は継続して行うこととなった。

既存の集会活動である縦割り班での読み聞かせを行う6年生と、「千代丸読書レベルアップ！大作戦 - 『読み聞かせのコツ』をつかもう！」-と題したWS形式の授業を行った。この授業では、これまでの活動を振り返るとともに、今後どのように取り組んでいきたいかを話し合い、これからの活動に生かせる読み聞かせの基本的なスキルについて確認し、習得をめざした。WS形式をとったことで、児童自身が課題を自分のこととして捉え、友達と意見を交流する中で、一人一人が自覚的にこれからの活動について考えることができた。授業後の集会で以前よりは、笑顔と自信をもって臨む姿が見られた。

4) 教科に関連した読書活動や授業

主な協力学級である2年生と5年生で国語科や生活科、学級活動の中で読書活動や関連する授業を行った。2年生では、5月の初めに学校図書館の利用の仕方を理解するための授業を行った。6月には、互いに、ただ一人のために絵本を選び、読み合うという喜びを味わってほしいとの思いから「読んであげたいな この1さつ」と題した絵本の読み合いの授業を行った。互いに、質問し合いながら、読み合いなかよしカードを完成させていくことで理解を深め、読んであげたい絵本を選んだ。ペアになり隣同士で腰掛け、一冊の絵本を二人で読み合った。普段は賑やかな子どもたちが、一心に相手のために読み、また、じっと耳を傾け聞いていた。穏やかな優しい時間であった。

生活科の町たんけんて町内の神社仏閣を訪れた際には、その場所に合った絵本の読み聞かせを行った。野外での読み聞かせは、場所や体験と結び付き、子どもの想像力をより高めるような気がした。

5年生ではPOPづくりに挑戦し、作品は「お話の森通りⅡ」に掲示したことで、体験コーナーの手本となり、他の児童の関心を引いた。

各教科の教育課程の中で機を逃さず、読書活動を取り入れていくことで、学習に広がりや深みが生まれ、主体的な学びを深めるきっかけとなる可能性を感じた。

2 鳴教大児童図書室・公共図書館との連携

読み聞かせ用の絵本のほとんどを鳴門教育大学附属図書館児童図書室と小松島市立図書館、徳島県立図書館、徳島市立図書館から借り入れた。そのうち、鳴教大児童図書室と小松島市立図書館からは団体貸出制度も利用し、学級文庫の充実につなげることができた。特に、鳴教大児童図書室では、団体貸出モニターとして（2か月間50冊貸出可）定期的に絵本を借り入れ、各学年に分配し、鳴教子ども文庫として設置した。この時、司書にテーマや用途を伝えることでそれに合った絵本を紹介してもらえ、借り入れをスムーズに行うことができた。

日々の読み聞かせに借り入れた絵本は、借り入れから時間の計測、ブックリスト作成、貸出、回収までに手間も時間もかかり、実習生という立場でなければ、出来なかった。この問題を解消するために、これまでに借り入れた絵本を「短時間で読める絵本ブックリスト」として整理することで、今後の借り入れを容易にする必要があった。

3 教職員との連携

1) 課題、情報共有のために

2) 教職員アンケートについて

実習での課題決定から教室での取組まで、実際に動いてくれたのは教職員全体であった。忙しい日々の中で、研修や資料を通して共通理解をもち協力してくれ、教室での児童の様子なども折に触れ伝えてくれたので、計画の見直しや改善にも反映することができた。校長はじめ教職員全体のサポートのおかげで、計画を実践に移し、進めることができた。

4 家庭との連携

10月の秋休みに「親子読書のすすめ」と題した文書を配布し、家庭での読書を促した。人権集会で保護者による読み聞かせも行われた。

第4章 まとめと今後の展望

実習で使ったブックリストや絵本のスライド、またスライド作りのノウハウなど、読書活動を推進する中で得た知識や連携のネットワークの共有化を図っていく。子どもの期待や信頼に応えられる継続的な取組を大事に、読書を習慣化させ、読書を生活の中に自然に根付かせていくような取組をこれからも進めていきたい。

第5章 終了後の課題と取組の展望

教職大学院での学びや学校課題フィールドワークでの実践を通して、教職員同士が対話し、交流し、互いに認め合いながら力を合わせていくことの必要性と、そのことで生まれるパワーを強く感じた。今後は、教職大学院で学んだ専門的知識、理論を胸にそっと抱き、チームとしての学校づくりに貢献していくとともに、個々の児童の内面理解に努め、一人一人の心に寄り添った指導ができる教員でありたい。子ども達一人一人が自然に、安心して自分の思いや考えを表し、認め合い、受け止め合い、主体的に行動していける人づくり集団づくりに努めていきたいと思う。